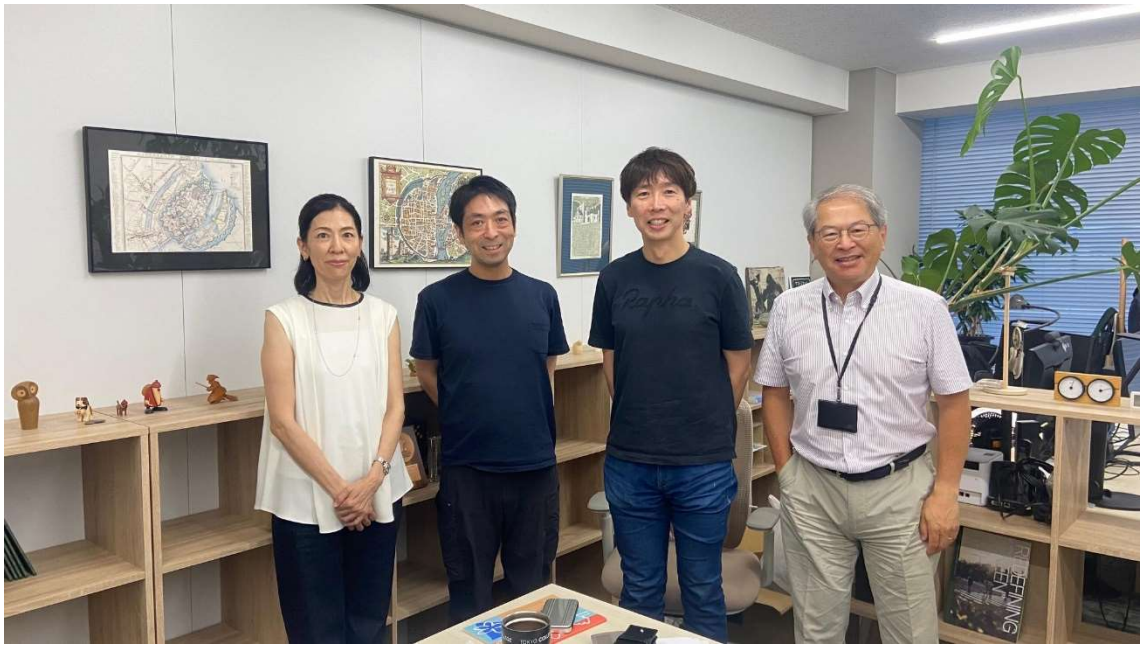
この企画は、日本造園学会の創立 100 周年及び GREEN×EXPO 2027 を契機として、気候変動と多発する自然災害、食料・エネルギー危機、感染症の蔓延などの世界的な課題に加え、本格的な人口減少及び超高齢化社会を迎えつつあるなど、時代が大きく変動する中で、「ランドスケープアーキテクトは明日の都市に貢献できるか」をテーマにこれからの都市のあり様について対談を行っていく、日本造園学会と都市緑化機構の共同企画です。

今回は、第２回として、安藤勝信さん（ 株）アンディート代表取締役）、三島由樹さん（ 株）フォルク代表取締役／ランドスケープデザイナー）をお招きし、聞き手として秋田典子さん（千葉大学大学院教授、日本造園学会理事）、横張真さん（東京大学特任教授、都市緑化機構理事長）にご参加いただき、「参加」をテーマに対談していただきました。



（右から、横張真さん、安藤勝信さん、三島由樹さん、秋田典子さん）

横張真（以下、横張）：この対談シリーズは、様々な専門分野でご活躍の方々と、我々、ランドスケープ分野の方との対談を通じ、バンパビリティが生み出され、ランドスケープ分野の将来についてのヒントを得たいという意図で企画したものです。今回は、世田谷区で「三年鳴かず飛ばずプロジェクト」など住宅の再生と新しい価値の創出に取り組んでいらっしゃる安藤さんと、ランドスケープデザイナーであり、下北沢の小田急線線路跡地で植物と人とまちの新しい関係づくりをコンセプトにコミュニティ活動に取り組む「シモキタ園藝部」の代表である三島さんに来ていただきました。

　まずは、お二人から、自己紹介を兼ねて、これまでに取り組んでこられたことなどをご紹介いただけますか。

多彩なアプローチによるまち・住まいづくり　～赤鬼と青鬼～

安藤勝信（以下、安藤）：安藤勝信と申します。生まれは世田谷の祖師谷大蔵です。小田急線に祖師ヶ谷大蔵という駅名がありますが、実は祖師谷と大蔵という隣接するふたつの街が駅名になっていて祖師谷は商店街が、大蔵は農地や緑地が広がる街で、私はその大蔵の方で生まれました。農村としての大蔵はその後、私の祖父の時代に都市化が進み、人口が増えていく中で農地が都市公園や団地に供されていき、分断されていくことで農業が持続できなくなっていきました。

　当時祖父は、人口増加を背景に、集合住宅の経営は今後ニーズのある仕事だと思い、事業として取り組もうと考えていたそうです。しばらくはうまくいっていたようなのですが、どの場所も駅から遠く、新築との競争もうまれ、少しずつ空き部屋が増えていきました。

そんな家族の事業の危うさをサラリーマンとして眺めていることに違和感を感じて、不動産の業界に足を踏み入れたのですが、まだまだ改善できる余地は多く、自分なりにできることがあるのではないかと考えました。家族から物件を買い取り、住宅の再生に取り組み始めました。賃貸住宅を建てる一般的な理由には、税的な背景や、相続、投資的な背景など事業の間接的理由があることが多いのですが、それから 10 年ほど経ち、ひとの暮らしを中心に事業として賃貸住宅の計画や運営をしていくことができるようになりました。

生まれ育った家と農地が、昭和 40 年に計画された道路が 60 年越しに整備されるという時に解体されてしまうことになりました。定石どおりであればコインパーキングとかサブリースアパートとかになってしまったかもしれませんが、たまたまこういう背景を持っていたため、現在のプロジェクトにつなげることができました。

計画道路により生まれ育った家と農地が分断されてしまった

写真提供：安藤勝信さん

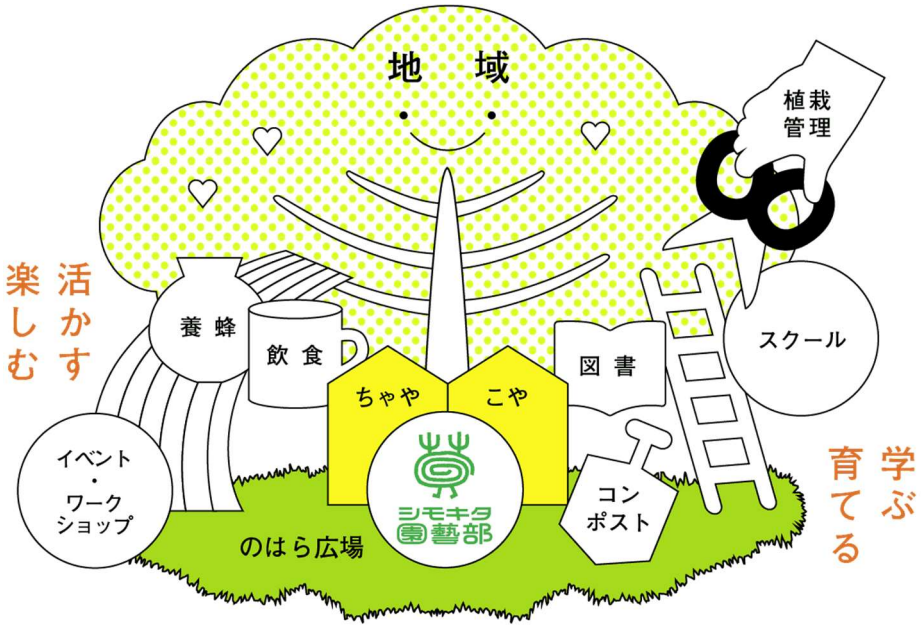
段階的に作ろうとか、１つ１つを小さく作って周辺に農地を残そうとか、人々の協力体制を作ろうとか、農地をみんなで利用するものにできたらいいなという思いで、今、「緑農住」に取り組んでいます。

三島由樹（以下、三島）：
三島由樹です。ランドスケープデザインの仕事をしています。アメリカでランドスケープデザインを学び、2 年ぐらいニューヨークのランドスケープデザイン事務所で働いたあと、日本に戻ってきて、2015 年に独立して、もうすぐ 10 年になります。

本日のテーマである「参加」は、とても重要なキーワードであると考えていて、プロとして関わりながら地域の人たちと一緒にランドスケープを作るということを意識して、これまで取り組んできました。最近は、シモキタ園藝部など、自分がやりたいと考えていたことが実現できるようになってきました。

私が「参加」を重要なキーワードとして考えるようになったきっかけは、ランドスケープデザインを学んだアメリカにあります。きっかけの１つ目は、日本語がすごく恋しくなって大学図書館で日本語の本を読み漁っていた際に、宮本常一さんという民俗学者の書いた本に出会い、民俗学的な研究のアプローチとか、地域の文化とか、人々のなりわいなどを大事にする考え方などにとても感銘を受け、人々からきちんと話を聞くこと、その暮らしに寄り添うことが、自分がやりたいことに近いと思ったことです。もう１つのきっかけは、就職してからの経験です。アメリカのランドスケープデザイナーは、プロフェッショナリズムが強く、非常に成熟していて、社会からの信頼も厚く、報酬も高い。市民も、ワークショップの参加率が高いし、すごくレベルの高い意見が出る。プロとアマチュア、それぞれのレベルがとても高いというのが印象的でした。ただ、一方で、プロとアマに明確な役割分担があり、こういうやり方は日本で本当に実現可能なのかなと感覚的に思っていたことです。

日本に帰ってきてからは、プロとアマの境界をどうやって無くしていこうかと試行錯誤してきたような気がします。日本では、かつては道普請（みちぶしん）と言って、地域で道路を補修したり清掃したりする文化がありました。これからのランドステープアーキテクトの１つの役割として、社会的普請を仕掛けることが重要なのではないかと考えています。



シモキタ園藝部の事業内容

出典：シモキタ園藝部 HP（https://shimokita-engei.jp/about.html）

先ほどの安藤さんのお話にも通じるのですが、シモキタ園藝部の企画を考えていた時に考えていたことは、まちのみどりを自分たちの暮らしに使えるものにできないかということでした。みどりは、グリーンインフラという言葉があるように、身近で社会的なインフラとして認識されてはいるものの、最近の再開発などでは専門家によって緻密にデザインされ、洗練されたものになってきて、一般市民が関わったり、さわったり、つかったりすることができないものになりつつあることが、とてももったいないと考えていました。だからこそ小田急線の地中化に伴う跡地活用の際には、現代の雑木林のような、暮らしに活用することができるみどりをまちの人たちと作ってい

2011

2022

線路から緑地へ　　（写真提供：三島由樹さん）

きましょう、という提案をして、それがシモキタ園藝部という企画の始まりになりました。

　ランドスケープデザイナーである私にとって、「参加」はデザインに大きな可能性をもたらしてくれるものと思っています。クライアント、特にそれが行政である場合は、手間がかかる提案やデザインを受け入れないことが多いのですが、シモキタ園藝部では、地域住民が参加しているコミュニティが緑地を管理し続けるという提案をしたことによって、一般の公共緑地では使用しないような種類の植栽や管理方法も認めてもらうことができました。「参加」という方法を責任あるかたちで使うと、通常ではなかなか実現が難しい自由度のある公共のデザインが可能になるように感じています。

横張：お二人には、緑を使う、緑に触れることのできるまち・住まいづくりに関わっているという共通点があると思います。一方で、お二人の活動は、一市民、農家としての立場での草の根の取組と、行政やディベロッパー、電鉄会社などの大きな組織を説得してデザインを実現していく取組と、対照的なアプローチであると言えますね。

安藤：よく例えとして、計画者の視点を赤鬼、住まい手や使う側の視点を青鬼に議論したりすることがあります。私は、自分のことを基本的には青鬼であると考えていますが、良い暮らしの器を造ろうと取り組むときには赤鬼の立場からプロジェクトを見ている瞬間もあります。

　大切にしていることは、私が計画した器に人をあてはめるのではなく、まず人との出会いがあって、その人たちの営みを膨らませていきたい。小屋型のシェアハウスを設計して居住者に入ってもらったのではなく、そういう生き方をしているひとが暮らす場所を実現するためのデザインが、かたちになっていく。

　ですから、私は赤鬼と青鬼を行ったり来たりしながら、時に青鬼として赤鬼と対峙したり、時に赤鬼の仲間として青鬼に話すこともあります。

横張：三島さんは、ランドスケープデザインのプロフェショナルとして、基本は赤鬼でありつつ、シモキタ園藝部の代表としては青鬼の立場で、行政などの赤鬼に対して対峙することもあるのでしょうか。

三島：自分自身は、あまり赤鬼らしい赤鬼にならないように努めているところがあると思います。ワークショップなど赤鬼としての立場で関わる際も、参加者をリスペクトし、参加者から学びながら、自分も青鬼としての気持ちで楽しむというスタンスで取り組んでいます。

シモキタ園藝部は、ワーカーズコープ形式で、私も含めみんなで出資して法人化した時が大きな転換点のひとつになったような気がしています。私は、法人化するまでは、赤鬼として関わってきましたが、法人化してからは、この活動に関わり続けたい一個人、青鬼として参加しています。この活動を始めた責任から 3 人いる共同代表の一人にはなりましたが、基本的には他のメンバーとフラットな関係で関わっています。

安藤：赤鬼と青鬼を行ったり来たりするという話をしましたが、私の場合はどんなに青鬼だと自称しても所有者としてのパワーがあり、それは時として赤鬼の振り回す金棒になってしまうことがあります。振り回す前に気がつき金棒をおろしても青鬼にはなれません。

　そういう時には鬼をやめて器(環境)になってしまおうと努めます、諦めにも近いかもしれません。自分は人間ではなく器で、居住者はその器が好きで勝手に住み着いているという感じです。サッカーに例えると私はサッカー場で、走りやすいグラウンドとかボールを見やすい照明とかは整備するけれども、選手がどんなプレーをするかはコントロールしないという状態です。

三島：私は、サッカーで例えるならプレイングマネージャーが近いかなと思います。良い環境を作り出すデザインを手がけつつ、自分がその環境の内部に入った時にはみんなと同じ目線で楽しみたい。時々赤鬼として振り返って、みんなが楽しそうな表情をしているのを見たいですし、自分自身もワクワクした気持ちでいい顔をしていたいと思っています。

計画道路で分断された敷地の片側に家族型のシェア長屋を、もう片側に母家＋小屋型シェアハウスを段階的に計画中（三年鳴かず飛ばずプロジェクト）　　写真提供：安藤勝信さん

うやむやのススメ　～多様な参加を受けとめる緩やかさ～

横張：お二人のように、状況に応じて赤になったり青になったり、色を変えるというあり方は、プロとアマが明確に分かれているアメリカのような社会では起き得ず、極めて日本的と言えるのかもしれませんね。

安藤：赤鬼にもいろいろいるのだと思います。「桃太郎」の赤鬼もいるし、「泣いた赤鬼」の赤鬼もいて、後者は必ずしも悪ではないという価値観がありますよね。

　宇宙飛行士たちが参加するワークショップのファシリテーションを手掛けた知人が面白いことを言っていました。国別に宇宙に行くと、地球に戻ってくるときに、他の

国の人々は主張し合っていたが、日本人は関係性があまり変わらなかったと聞いたことがあります。なぜかと言うと、狭い空間で人が暮らすと、他の国ではお互いの主張が始まるけれども、日本人はうやむやにする力が高いから、うやむやのまま降りてくる。

横張：偶然なのですが、前回（第１回：ダイバーシティ＆インクルーシブ）の対談でも、あえて白黒をつけないとか、勝敗を決めずに、まあまあで済ませる日本文化は、これからの社会や世界にとって大事なのではないかという話をしました。

　私は、白でも黒でもない、グレーに価値を見出す姿勢は、日本人のいいところだし、ユニバーサルな意味をも持ち得るのではないかと思っています。

安藤：ネガティブケイパビリティのような、不確実性を不確実なまま受け取る能力のようなものが、昔の日本にはあったはずなのに、いつの頃からかポジティブケイパビリティが大切だということになり、その時代が長かったのかなと思います。

　建物を建てる時に、よく「地鎮祭」を執り行うと思うのですが、これは神道の儀式で、土地の神様にお祈りをしてその土地を鎮めるという意味があるそうです。ある時、菩提寺のご住職から、仏教の儀式に「地鎮式」があり、その土地にいるいろいろなモノを追い出さずに、自分たちも参加させてもらって、共に居させてもらうという意味があると伺いました。その背景には、「山川草木悉皆成仏」という言葉があるように、草木も、国土までも、仏になる可能性があって、それらを分けないという考え方があると聞いて、プロジェクトとして建築する際に 2 棟とも地鎮式をやっていただきました。このような、昔からの日本的な感覚を取り戻す動きがあってもいいなと思っています。

三島：シモキタ園藝部でもすごく近い話があります。「シモキタのはら広場」を作る時に、どのような野原にするかというワークショップを開いたのですが、在来種を使って武蔵野の野原にしたいという人たちもいたし、きれいなお花畑にしたいという人たちもいて、いろいろな価値観がぶつかりあいました。その時私たちがしたことは、勉強会を開催して植物の専門家をお呼びし、在来種・外来種の問題について学び、シモキタのはら広場が置かれている環境の状況について学ぶとともに、対話を繰り返す中で、「結論を出さない」という着地点を見出しました。決してあいまいにして終わったのではなく、常に学び続けながら、何がいいのか考え続けようという状態にたどり着いたことで、みんなが納得し、前に進むことができたように思います。

シモキタのはら広場

（写真提供：三島由樹さん）

今も園芸部では、年２回、専門家の方の協力のもとに生物調査を続けていて、この場所で在来種や外来種がどのように遷移しているかをモニタリングしています。今後どんな野原にいきつくか分からないけれども、その過程を学ぶことを楽しもうとなったときに、いろんな価値観の人が共存し続けることができる、開かれたプラットフォームをつくることができたのではないかと感じています。

まちの活動、社会の移り変わりとともに豊かに変化しつづける植生と生態系（シモキタのはら広場）

（写真提供：三島由樹さん）

秋田典子（以下、秋田）：答えが一つに決まるという考え方は、一神教に通じるところがあり、一方で一つの結論に収斂させずに、少しずつ考えていきましょうという姿勢は、全てのものに神様が宿るとする日本的な考え方に近いように感じます。変化に対応しやすいため、持続可能性があるとも言えるかもしれません。私が関わってきた被災地のガーデンのデザインも、知らない間に細かな部分でどんどん変化を続けていますが、それはそれでいいし、むしろ変化することに未来を感じます。

横張：住民が、自ら参加することによって、自分たちの住んでいるまちや住まいが変わることを実感することは、非常に重要だと思います。

環境アセスメントも「参加」のシステムの一つだと思いますが、現在の手法はあく

までも赤鬼が作ったシステムに青鬼が参加する仕組みになっていて、赤鬼と青鬼の役割は固定されていると言えますね。

秋田：日本において、環境分野や都市計画分野で参加の議論が高まったのは1980年代から90年代ですが、あの頃は今よりずっとアメリカの影響が大きかったのではないかと思います。

横張：アメリカ社会は、一度その中に入ってしまえば自分の力量次第で自由に何にでも挑戦できる、という面もありますが、例えて言えば、あくまでも既存のOSが前提となっていて、そのOSの上のアプリケーションは自由にしていいという社会であると言えるのではないかと思います。

　ミャンマーのヤンゴンのパゴダの周囲にあるオープンスペースの歴史的変遷に関する研究があります。イギリスの植民地になる前は、そのオープンスペースには特定の役割がなく、大きなお祭りの頃には全国から人々が集まってきて、キャンプができて、そのキャンプのための青空市ができるといった具合に賑やかになるのですが、日常的には子供が遊ぶ原っぱのような空間で、多用途に使われていたのだそうです。ところが、イギリス人が「公園」として用途を固定してしまった結果、キャンプや青空市といった利用が全部禁止になってしまい、結果的に、それまでその空間が持ってきた特徴的なキャラクターが失われてしまったそうです。白でも黒でもない、動的平衡の中で維持されてきたことが、西洋的な二元論的な世界になると、成立しなくなってしまう、という例のひとつといえるのではないでしょうか。

安藤：西欧では努力して緑を確保する必要があったため、彼我を区別して「自然（Nature)」という言葉が生まれたけれども、日本では放っておいても草木が生えてくるので、「Nature」という言葉が入ってくるまで「自然」という単語は存在せず「自然（じねん＝おのずからしかる)」であったと聞いたことがあります。

　まち・住まいづくりを進める上で、かつての日本のあり方ややり方をどう取り入れていくのか、つまりOSそのものを取り換えてみることも、考えてみる必要があるのではないかと思います。

日常に参加を取り入れよう　～緑を使いこなそう～

横張：シモキタ園藝部のように、両論併記でもなく、別々に取り組むのでもなく、あえて白黒をつけずに、みんなで学ぶことを楽しみつつ、リテラシーを共有するというあり方は、これからの住まい・まちづくりにおいて、「参加」の取り組みを進める際の、非常に重要なヒントになるのではないでしょうか。

三島：そうですね。自分たちで新しい発見をしたり、少しずつ何かを達成したりということは、参加者にとっての高いモチベーションにつながると思います。多様な参加者がバラバラに動けることも大事ですが、価値観が異なる人たちがチームとして一緒に学んだり取り組むことを楽しむ素地をつくることが重要だと思います。

安藤：コロナ禍を経てまだ再開はできていないのですが、福祉とリノベーションのプロジェクトである、「タガヤセ大蔵プロジェクト」の一環として、月に１回、認知症カフェを開催していました。近くの住民で、カフェという言葉に惹かれて遊びに来てみたら、実はデイサービス＋αの場所だったけれども、お茶を飲んで楽しくなって、そのままボランティアとして来てくれるようになったということがありました。

　このような、能動態でもなく、受動態でもなく、思わず入ってきて気付いたら何かしている、中動態的なことが起きるような場をつくりたいと考えています。

長期間立ち入り禁止になってしまう道路予定地を行政と協議して暫定的に人の出入りができる場に。母家は住居兼区の居場所事業として日中の親子の集まる場になっている、小さく作ることで周辺に農地や緑地を残せるようにしている　（写真提供：安藤勝信さん）

三島：シモキタ園藝部では、コンポスト発電の実験を進めている人がいたり、ヨガ教室をやっている人がいたり、同時多発的に無数にいろいろな活動が起こっています。もちろん、誰かがお願いしているわけではありません。みんながそれぞれ、勝手に色々やることをお互いに認めようというところからスタートしていまして、それが今も続いています。誰かが何かをやっている姿を見て、自分もこんなことやってみようかと創発されていく感じなんだろうと思います。

　シモキタ園藝部の部員数は、20 人から始めて、3 年間で 200 人を超えるほどに広がってきました。昨年末に初めて総会を開いたのです

シモキタ園藝部による植栽管理の様子

（写真提供：三島由樹さん）

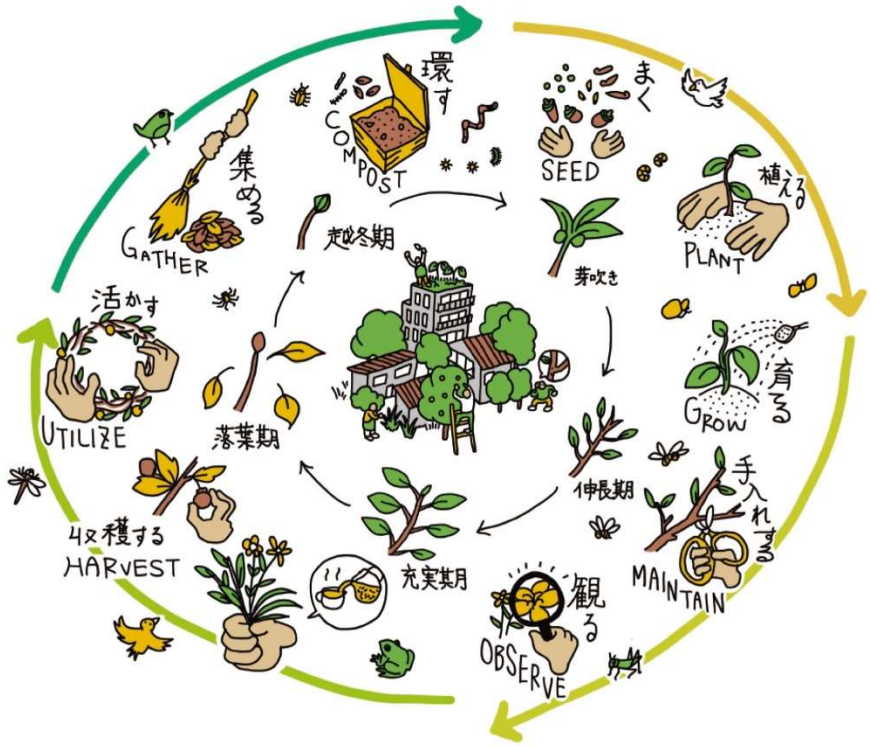
が、部員同士でも初対面の人がたくさんいて、私（代表）のことを知らないという人もたくさんいるし、私も初めて会う人がたくさんいるし、こういうのってすごく良いなと思いました。 コミュニティとしてあまり緊密すぎないというか、干渉しあいすぎない空気感がシモキタ園藝部にはあり、そのことが中動態というか、それぞれが自然に振舞うことができる場を作り出せているのかもしれません。

安藤：フェイズフリーという考え方も、これからの時代に重要だと思っています。地域で消防団を作って、有事に出動できるようトレーニングしておくというのは、フェイズがある状態ですが、フェイズフリーは、住まいが電力を自給できているとか、火を使って煮炊きをするとか、薪を割るとか、みんなでご飯を食べるとか、日常生活がそのまま防災に役立つあり方です。日頃やっていることがそのままインフラになるという状態を、どのように住まい・まちづくりにつなげていくのかという、フェイズフリーな取り組みが重要だと思います。

三島：シモキタ園藝部でも、自分たちがやっていることは主には地域の植栽管理だけれども、その活動は実は社会福祉にも繋がっているのではないか、結果的に色々な社会課題に対する包括的なアプローチになっているのではないか、という意見が部員の人と話しているとよく出てきます。自分たちの取り組みが有する、単に植物の管理だけではない価値、社会インフラとしての価値に関する理解を、行政や地元企業に少しずつ広げて行けたら良いなと思います。

安藤：実は、緑を暮らしの中に取り入れていこう、という同じ目的をもつ者同士、私たちの活動とシモキタ園藝部の活動の交流を進めていきたいと考えています。シモキタ園芸部の活動という大きな炎が中心にあって、その周辺に私たちのような自分の家で緑を体感する活動という小さい火がいくつかあるような状態にして、緑を使う、緑に触れる人たちが、まちの中に増えていくといいなと。

三島：嬉しいです。私もいま各地で進めている他のプロジェクトでも、これからどんどん緑を使いこなす取組を広げていきたいと考えているところです。植物が持っている関わりしろのポテンシャルは非常に大きいと思っています。



植物とのかかわりしろをつくるシモキタ園藝部

（画像提供：三島由樹さん）

横張：赤鬼と青鬼が、状況に応じて色を変えるという参加のあり方、柔軟な手法こそが、世界に向けて日本が発信できる、日本の価値であり、そのことによって緑を使いこなす人が増え、さまざまな社会課題の解決策が生まれていくのかもしれませんね。

　ただし、その時に、都合のいいときだけ青鬼のふりをする赤鬼が出てきてしまうという懸念があるのではないか。青鬼にも赤鬼にもなれる鬼族は、責任逃れのために色を変えない覚悟が求められると思います。

安藤：赤鬼だけでも青鬼だけでも、まちや住まいをつくることはできませんが、赤と青のバランスをどうやってとっていくのか、専門家のみなさんとも一緒に考えていきたいです。

三島：赤鬼が青鬼のふりをする現象は、確かに起こり得ると思います。ただ、その場合も、青鬼のふりをずっとし続けるのは難しいので、青鬼のふりをしているだけの赤鬼は自然と淘汰されていくのではないでしょうか。

秋田：青鬼のふりをする赤鬼は、私もよく目にします。偽物の青鬼が淘汰される過程で、まち・住まいづくりへの参加そのものが意味がないと見なされてしまい、「参加」が失われてしまうことがないように気をつけなくてはいけませんね。

横張：その通りですね。最後に、これからの抱負をお願いします。

安藤：元々は音楽用語であるポリフォニー（多声音楽）は、メンタルケアの世界では、いろいろな意見が共存している状態を指し、対話による症状緩和を目指すオープンダイアログの理想的な姿といいますか、ハーモニーのような予定調和の世界ではなく、いろいろなものがぶつかり合うのでもない、多様性を受けとめられるあり方のことだそうです。医者と患者だけが向き合って治療を施すのではなく、異なる立場の人や同じような悩みを抱える人たちと話をして、いろいろな角度から物事を見て、気付きを得て、オープンダイアログのような、自分自身も住まい・まちづくりに取り組んでいきたい。

　そして、その人をその人のまま尊重する、エンパワーメントにつなげていきたいと考えています。

三島：「ランドスケープ」は、ドイツ語にすると「ランドシャフト」になりますが、その土地（ランド）に生かされているコミュニティ（シャフト）という意味があるそうです。自分たちがその土地に生かされているという感覚、その土地を生かしているという感覚を大切にし、土地とコミュニティを結びつけることを通じて、これからの社会のあり方について考え、色々なアプローチを実践していきたいと考えています。

横張：お二人のご活躍を期待しております。本日はありがとうございました。

（終了）